慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	十九世紀初期に於ける英国都市生活の一面（一）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1151(89)- 1162(100)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

美しい赤い腮鬚を生して、どちかと云へば上向きの鼻で奥深い黑い眼を持つた美しい人である。……Rossetti は云つた。私は繪を畫かなければならぬ。私は出來ると彼は云つた。彼は非常な偉人で敎師のやうではなく、權威を以て語るので、私は試みなければならない、私は多きを望まない。けれども私は全力を盡さう。彼は私に實際的の注意を與へて呉れた。……だから自分は建築を捨てずに、事務所の仕事の外に一日六時間だけ繪が畫ければいいと思つてゐる。こんな調子の生活では快樂を得ることがないだらう。けれどもそんなことは關はない。私はそれを要求する權利はない。愛と仕事、この二つだけあれば足りる。……私は政治的社會的の問題に興味を持つて取扱ふことは出來ない。私は大體において、事柄が混亂してゐるのを知つてゐる。さうしてそれを少しでも正しくする能力も天職もないことを知つてゐる。私の仕事は、ある形で夢を實現することである。もし私がこの繪畫を修得することが出來るならば、しなければならないことは澤山あるだらう。私は失敗するだらうとは思はない。だが私は自分の機會の少ないのを知つてゐる。だが私は自分のなさなければならない仕事のあることを喜んでゐる。私は大さう小さい藝術の宮殿に入ることにあつた。……Ned（Burne-Jones のこと）と私は一處に住まうとしてゐる。私は八月の始めにロンドンへ行く。」Mackail, Life. I. pp. 109-110）

かくの如く Morris の計畫した二重生活は、當分の間行はれてゐたが、遂にその煩に耐えることが出來なかつた。繪畫に對する彼の熱心は段々と募つて來た。殊に秋の間に Street と一處に Low Countries を訪問したことは繪畫に對する熱心を更らに增した。さうして遂に千八百五十六年の末にこの「夢の體現者」は Street の事務所を去つたのである。（未完）

拾九世紀初期に於ける英國都市生活の一面（一）

奥井復太郎

一

アークライトの機械的發明と共に開かれた時期は唯に英蘭のみならず全世界の經濟史上に於ける新時代の開始であつた。

此の時代は人類の自然に對する支配力の增大を語る一つの大なる場面であるが、生產並びに交通の新しい近代的方法は地球上に於ける何れの國の古き社會的秩序の維持と並存する事が出來なかつたので是等古き秩序や慣習は徐々に或は急激に破壞された。かくて一七七〇年から一八八四年に亘る七十年間に英吉利に起つた產業革命は其の國が全面を隈なく變化してしまつた。（Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. modern times, part II Laissez-faire. 609-613 pp. 參照）

アッシュレエに依れば產業革命と云ふ名稱は、トインビイが一八八四年に出版した同じ名稱を表題とする講演の中で此の期間に生じた出來事が實に「革命」と呼ばれても不都合でない程に完全にして且急激な變化を社會に齎したと云ふ事を明らかにして以來廣く唱へられるに至つたのである。（W. J. Ashley, The Economic Organisation of England. 1914. p. 140）E. P. Cheyney も產業革命に齎された工場工業制度の各方面に及ぼした影響からして此の時代の變化に對して「產業革命」と云ふ名辭を用ふるのは誇

稱された言葉でもなければ又不適當な名稱でもなしと述べてゐる(An Introduction to the Industrial and Social History of England 1901. 213 p.)「近代歐羅巴の經濟的發達」の著者の F. A. Ogg も、英吉利の經濟史に於ても大陸諸國の經濟史に於ても「產業革命」と云ふ名稱は正確な學術的意義を有するものであつて漠然と一般に經濟的調整を意味する爲めに用ひらる可きものでないと唱へてゐる。(Economic Development of Modern Europe. 1918. p. 118.) 從てこの「產業革命」と呼ばれる社會現象は千七百五十年頃から十九世紀の前半迄の間に起つた機械の發明及び大規模生產に此等の機械殊に蒸氣力によつて運轉される機械が盛に使用される樣になつた結果製造工業の過程及び狀態に生じた變化を指すものである。(同上)カンニングハムが「發明の時代」と云つてゐる樣に生產機關の發明は實に產業革命中の主なる現象であり「機械の發明に關する話はその興味や重要さに於て決して君主とか議會とか戰爭とか條約とか或は憲法と云つた樣な普通世間によく知れてゐる歷史に劣るものではない。」(Robinson and Beard, Development of Modern Europe, II. 31. Ogg quoted. 或は Outlines of European History, Part II. 262. p.) 然し機械の發明に現はれた現象の裏には更に他の勢力がなければならないアッシュレエは前に述べたトインビイの「產業革命」に就て次の樣に云つてゐる。「……アダムスミスが國富論を著はし、ジェームスワットが蒸氣機關を完成した千七百七十六年と第一改革法案(The first Reform Bill)の出た千八百三十二年との間の變化は、この間により大なる範圍に於て又より迅速には行はれたが、それでも其の以前から進行して來てゐた變化と確實進捗に次ぐものである。」この大なる時期は之れをその前後の時代から事實に於て嚴格に區劃する事は出來ない。……」(Ashley, ibid. p. 141)。新しい產業組織が生れるに就ては之れに對する誘因が既に存在してゐなければならない。「十八世紀が進むにつれて經濟的發達の一形體が一般の經濟的組織の上に迫り來りつゝあつた樣に思はれる。之れは商業の絕えざる膨脹と輸出向きの英吉利製造品に對して漸次增加して來た需要とである。」前揭の Cheyney は、英國の船舶に依つて植民地や愛蘭や大陸、亞細亞、阿弗利加に每年輸出される多量の財貨や國內消費の貨物が多くの場合數世紀前から引き續いて來たのと同じ方法や機具や勞働の組織に依つて製造せられてゐた事を指摘してゐる。(前揭書二〇三—二〇六頁參照)、新機械の發明は是等の要求から生れたものである。又「都市勞働者」の著者である Hammond 氏の云ふ如く新しい時代を代表する「新しい勢力」である資本は既に merchant-manufacture の手に於て家內工業の形式に現はれてゐる。(Ashley, 141 p.)

然し生產の技術的方面に加へられた改良は總て工業經營組織の變化を齎し家內工業組織は全く近代的な工場工業制度に變じた。從つて此等の變化を生み出した原動力が恐く「產業革命」として區劃せられる十八世紀後半と十九世紀の前半に於ける時期の以前に既に働いて居た事はアッシュレエの言葉の如く疑はしとしても、この原動力の表現であり「產業革命」の表現である工場工業制度は上述の如く時代の要求に應じて生れた諸生產機關の發明の結果であるとも云ひ得る。本論の目的は表題の如く寧ろ產業革命として社會上に表はれた方に注意を向けるものであるから產業革命が起つた由來や又それが「革命」であるか否かは不問に附せざるを得ない。それ

は他の機會に讓つて此處では前に述べて來た十八、十九の兩世紀に跨がる期間に現はれた出來事を「產業革命」と唱へ其の間に起つた社會現象の一つに就てのみ考察する。

二

「產業革命」と呼ばれた其時代の經濟的方面に於ける變化は概略して云へば家內工業制度が嘗て主としてギルド制度に代つた樣に家內工業制度に代つて製造業の工場制度が勃興した事である。此の變遷の中で主要なる表現は工業が工場を中心として分布され是等の中心に向て人口が移動し、玆に著しい都市の發達を來し、更に製造貨物の產出に於て非常な增加を齎した事である。(Ogg. Economic Development of Modern Europe. 133 p) 工業經營の形式から云へば「產業革命」以降工場組織が生產經營の一單位となつた。而して此の變遷の過程に於ては機械の發明と云ふ事は重要視されなければならない。新しく發明された機械は個々の小規模の企業的勞働者の手には求め得られない程高價であり又之れに對しては多額の資本を要するものであり、又工場と云ふ可き一定の設備を必要とするものであつた。「Spinning jenny は機織工の家の內で用ひられる事が出來たが其の後に出來た紡績機械は非常に大きくもあり扱ひ惡くくもあつて到底住家では使用する事が出來なかつた、その上に人の力では殆ど間に合はない樣に大きな力と敏捷な運動とを必要とした。馬力も或程度まで用ひられたが直ぐ水力が用ひられる樣になつた。そして水力の供給のある流れに沿ふて特別の建物の造られる樣になつた。次の過程は蒸氣力の應用であつた。」(Cheyney. Ibid. 212 p.) かくて著しく資本が製造工業に投下された又此等の運轉された機械と一所に規則正しく働く多數の勞働者が必要とされ、彼等は所謂 Mill hands として生產の行はれる工場の中に群れ集められた。かくて制度としての工場工業の經營法が十八世紀最後の十年間以降の特色となつた。

近代工業經營制度の特色である工場制度はかくの如くに其の近因の一つとして機械の發明に隨つて起つたのである。勿論此の見方が全部でない事は既に述べておいた通りである。前揭の Hammond 氏は此の當時勞働者 ― 或は寧ろ職人 ― が新しく發明された機械に對して加へた反對や亂暴を以つて「新しき勢力」に對する反抗であるとしてゐる。(J. L. Hammond and Barbara Hammond, The Town Labourer, 1760-1832. 15-16 pp.) 從つて是等の現象を資本の勢力として眺めその資本が既に前から漸次勢力を得て來て居たと見れば既に述べたアッシュレエの觀察を容易に首肯し得るであらう。

然し機械が此の時代に於て一つの驚異であつた事は之れを想像し得る。新制度の勃興に依つて脅かされた家內工業的の、半農的の職人は彼等の生活の當面の敵として新機械を呪つた。「色々の發明が一人の人間や又何十人かの人間の仕事をする色々の機械を造り出した事は產業の轉置を生ずると共に多くの人々を職から放なつた。……其の時代に於ては殆ど凡ての重要な發明は其の發明家の頭の上に多くの勞働者の呪詛を投げかけた。」(Ogg, ibid. 147 p.) 更に機械と勞働者との關係に就ては面白い觀察が下される。或者は人類が機械に依つて更に力強く自然を征服したのを讚え他の者は人類の中の多くの者が機械の爲めに征服されたと說く、オッグが前揭の書に引用してゐる言葉は非常に興味がある。『諸々の偉大なる發明が工場に關して爲した事は機械の助けに對する人の勞働 (hand work)

の關係を變えた事である。道具や幼稚な器具は職人の指圖通りになつた。力を供給するのは職人であつて道具は其れに從ふのであつた。が大發明以後近代工場に於ける勞働者の位置は腕や器具に力を供給すると云ふよりも寧ろ機械を助けると云ふ事になつた。ワットやクロムプトン、やコォアトの發明に先立つて工場はあつたけれど十九世紀の「工場制度」は特に勞働者が機械に從屬する事を意味するものであつて之れは吾々が長い期間に亘つて觀察するならばこの結果を一革命として語るを得せしめるものである。」(Macgregor, The Evolution of Industry p. 40. Ogg quoted. ibid 145 p.) 之れは明かに多くの生産上の原動力が從來人の力を主としてゐたのが近代になつて他の動力に代るに至つた事を示すものである故にカンニングハムは云ふ。「從來人間の賤しい仕事に依つて爲されて來た仕事を水力や蒸氣の力を應用して爲す事は吾々が未だその意義を充分には認めてゐない新しい起程として十六世紀に於ける商業上の革命と比較すべきである」と。(Cunningham, ibid. 609 p.) 千八百三十一年「知識普及協會」は「機械の效益」と題する小さな本を英吉利の勞働者に當てゝ出版した此の小著は發明の光榮や、機械の永遠の祝福や、人が世界に於ける仕事の比較的に賤しい苦役の或るものを人間の脊から車輪やピストンに移して行く毎に享樂と文明の境の中に進めて行く勝利の歩みなどに就て華やかな光景を描いてゐる。……そして殆ど全頁にマッカウレェーの英吉利の産業生活を誇つた批評の生々しい說明書を提供してゐる、「何處にも外に人が之れ程物質の上に威力を振つてゐる所はない。」(Hammond, ibid 17 p.) 之れに對してハムモンド氏は、答へる新しい生産組織の下の勞働者は其の新しい勢力が如何にも非人格的で又彼等の本能や感受性を無視し彼等の生活の中に冷刻なる勢力を及ぼして彼等の風習や傳統や自由や、家庭の團欒や人としての尊嚴性格を破壞するのを認めてゐる一言を以て表はせば「何處にも外に物質が之れ程人の上に威力を振つてゐる所はない。」と (Ibid. 18 p.)

機械に就ては今は之れ以上述べる必要をみない。機械に就ての如上の觀察がその觀察者の見地の相違を示してゐるのは明かである。その相違に尙興味ある研究が含まれてゐる事は上記のハムモンド氏が新時代に於ける民衆殊に勞働階級に加へられた弊害は其の性質に於ては別に新奇なものではないが、其一つは彼等の全生活に非人間的な非個性的な紀律が强制せらるゝ所にあると主張してゐるのを注意して觀察すれば明かであらう。産業革命を境とした勞働者の生活は其前後何れが彼等にとつて有利であつたかに就て論ずる觀察は其の觀察者の現在の社會狀態に對する批評として見ても面白いものである。

三

更に産業革命の一現象である人口の都市集中は工場制度の發達と離す可からざる關係にある。又玆に近代都市が産業的都市として發達した理由がある。A. P. Usher は其の著「英國經濟史」――一九二〇出版――に於て「近代都市の職能は全く經濟的になつた」(二九頁)と云つてゐる。近世都市の研究、殊に其の發達史の研究が資本主義的經濟發展の研究を中心とするのも一理ある事であらう。

近代都市は其の規模に於て其の職能に於て之れと類似せるものを過去に求むる事は出來ない。都市人口の點に就てみるならば「十九世紀以前の歐羅巴の人口は大部分地方的で且つ固定

的であつた。古代希臘の共和國は都市國家であり又羅馬帝國は根本的には都市的基礎の上に組織せられてゐた。然し希臘羅馬の都市と稱するものは單に一個乃至數多の人口の稠密な中心地丈で出來てゐるものでなく其の周圍の田舍をも含んだ多少廣範圍に亘る地域をも合せてゐたのであり且その人口の大部分は或は散在せる地方民として或は又小さな村落の中に生活してゐたのである。羅馬帝國の後期には都市は高い程度の重要な位置を占め都市生活は廣い範圍に及んだ。然し西羅馬帝國の瓦解と獨逸民族のゴール不列顛、西班牙、伊太利占領と共に歐洲は全く邊鄙的組織と生活の時代に入つて、それは中世紀を通じて善く保れて來た。唯徐々に十一、十二世紀から先づ伊太利佛蘭西に於て都市が再び重要な地位を占め、新しい人口と、そのより大なる部分とを集め其處に起つた商工業の發達は共に

その原因であり結果であるの關係を示した。十三、十四世紀に於ける都市生活は活潑に行はれたが尙ほ最も繁榮した中心地の人口と雖も餘り多くはなかつた。この當時の記錄は少ないのみならず又殘つてゐるものも其の價値が疑しいが、唯二つの都市に就ては中世紀の間何時でも其の人口が十萬を越えてゐた事を確證を以て斷言する事が出來る。この二つの都市はパリとコンスタンチノープルである。實證を指示する事は不可能であるがロンドンが上に擧げた數字の人口を有してゐた事も確かな事らしい。然し中世の都市で最も其の盛んな時代に四萬から六萬の人口を持つてゐたものは其の數十五乃至二十を越える事は出來ない。其中にはMilan, Florence, Genoa, Cologue, Bruges, Ghent, Lübeckなどがある。都市の大多數は、經濟的歷史的意義を有する多くの都市を含んでゐても、中世紀に於

ては一萬の人口に達してゐなかつた。」（Ogg. Economic Development of Modern Europe. p. 14.）近世に入つても其の初期に於ては人口增加の傾向は緩漫であつた、之れを十八世紀後半、或は十九世紀前半に比べると著しい相違がある。一七〇〇年に於けるロンドンの人口六七四、三五〇は同五十年に六七六、二五〇に變つたに過ぎないのに一八〇一年には九〇〇、〇〇〇の激增を示してゐる。同年に於ける英吉利都市の人口を擧げてみれば　エヂンバラ—一〇二、九八七、グラスゴオ—一〇〇、七四九、マンチェスタア、リバプール、バァミングハム、ブリストル、は何れも七萬五千から十萬の人口を有してゐた。がそれでも都市人口の割合はまだ小さかつた。この十八世紀には僅かに新しい、且非常に重大な人口現象が漸く始まりかけた丈である。（同上一五——六參照）、

勿論十八世紀以前の都市人口が產業革命以後の都市人口に比して非常に少數であつたと述べてもそれは無意味である、オッグが述べてゐる樣に十九世紀以後に於ける人口現象の中に總人口の急激な增加にも注意しなければならない。彼は都市人口增加の原因の一つを總人口の增加に歸し「一定人口の二倍三倍の增加は他に特殊の勢力や事情が作用しなくとも人口の稠密した地方を發生せしめ村落は町に、町は都市に變化するに至る。」と述べてゐる（同上三五二頁參照）從て茲に特殊の注意を要するのは都市人口の增加でなくしてその集中現象である。オッグがWeberの「十九世紀に於ける都市發達」に擧げられた都市人口統計から概論した所によると「十九世紀の初期に於て英蘭ウェールスの都市人口は全人口の四分の一に當り同世紀の半頃に於ては約半分同世紀末に於ては寧ろ總人口の四分の三に及

んでゐる」（同上三五〇頁）、而して斯の如き都市人口の集中は産業革命に依つて生れた新工業組織と相ならんで考へられなければならない。前に述べた樣に工場制度の發達は一方に半農的職工の生計を脅かし彼等をして純然たる工場勞働者としてその中心地に收集したのみならず農業上に現はれた新しい變化は小農民の生活を脅かす事に依つて、彼等を純然たる農業勞働者の地位に落した。彼等は或は農業に止まり或は農業を捨てゝ工場の勞働者になつたのである。其の間の消息は E. P. Cheyney が巧みに描いてゐる。

「田舍地方に於ける、多くの小百姓は機織や他の家内工業で彼等の生活の一部分を補つてゐた。或は更に適當に云へば家内工業者が屢々何か百姓仕事をして彼等の生活資料を稼ぎ出してゐた、」然し機械の發明は彼等の工作的方面に於ける收入の途を困難ならしめた、機械紡績が出來る樣になつてから彼等家内紡績者の賃銀は壓迫を蒙つた機織に就ても同樣であつた。他方農業制度上の變化は工業上の革命と等しく作用して來た。集約的科學的耕作法の奬勵、一般に農業經營の進歩に對する傾向は、Enclosure の復活となつて現はれた。是等が共同使用地の喪失を伴ふて地方の小農民の生活を危ふくした。

The Law locks up the man or woman
Who steals the goose from off the common;
But leaves the greater villain loose
Who steals the common from the goose.

に現はれた感情は當時の農民の困窮を語るものであらう。更に耕作法の變化に伴つて農業に今迄より多くの資本を必要とするに至つた事は勞力と幼稚の農具以外に資本を持たない農民には非常な打撃であつた。是等の事情からして半農生活をしてゐた家内工業勞働者は二方面の脅威を受けたのである。「地方の家内工業者は事實二つの幼稚な産業經營に從事してゐたのである。彼等が手工業者である範圍に於ては彼等は製造工業の非常に安價な優秀な經營法と爭つてゐたし又彼等が百姓である範圍に於ては農業上に於ても同樣の事實にぶつかつた。是等の事情の下に彼等は其の所有してゐた土地を放棄して町に流れ行つて暫くの間手織機工として反抗を續けて行つたが遂には工場の勞働者となつてしまつた。他の者は彼等の手織機を捨てゝ專身土地耕作に暫くの間從事したが終極は彼等の土地を賣り拂ひ又は借地權を放棄して農業勞働者の階級に陷つた。結果は兩方の場合とも同一である。小農場は併合され Yeoman 小農階級は消滅してしまひ、家内工業は、工場工業に壓倒されてしまつた。世紀（十九世紀）の終る以前に英吉利農場の平均の大きさは三百エーカと計算せられ、家内工業的紡績、機織は其の後間も無く忘れられてしまつた。」（Cheyney, Industrial and Social History of England. 219-222 pp.）

是等の事情からしてエングルスは「英吉利に於ける無産者の歴史は蒸氣機關の發明と綿糸製造機械の發明のあつた十八世紀の後半に始まる」とし是等の發明は其の影響を及ぼして「漸次 farming weavers の階級は全く姿を消して行つて、全く賃銀のみで生活し何等資産を持たない資産と假りに名の附く樣な持物さへも持たない、機織工の新しく出來た階級の中に沈んで行き、かくて勞働者無産者となつたのである。」（F. Engels, The Condition of the Working-class in England in 1844. 1920. 1 p. 4 p.）

四

本論に入る前に以上他に亙つて述べたのは特

に意味があるからである。其れは單に工場工業制度の發達や都市人口の集中作用に就て述べる丈けでなく工場制度の發達に依つて都市に集められた所謂無產者階級が都市に來るに至る迄に如何なる經過を通つて來たかを明かにしておくのは本稿の目的である、十九世紀初期の都市生活の暗黑面の一部を說明する上に非常に都合がいゝからである。以下斯の如くして都市に集つた人々の生活の一面を覗つてみる。（未完）

利子說明の基礎に關するボエム・バヴエルクとクラークとの論爭（上）

金原賢之助

資本の本質は具體性なりや抽象性なりやに關しては、或は明確なる區別を設くる者あり、或は之を示さゞるものあり。以て Adam Smith 以來今日に至る迄甲論乙駁未だ意見の一致を見ざるの有樣なり。余は本誌前月號に於てクラーク教授の資本の機能に關する說の大要を紹介しボエム・バヴエルクの之に對する批判を述べたれども、實に斯る意見の不一致は一方が資本の具體性を主張するに反して他方が資本と資本財との間に嚴重なる區別を存せしめんとするに因るものにして、嘗て此問題に就て彼等が大西洋を挾みて花々しき論戰に力めしことは世人の記憶に存する所なるべし。斯くの如き見地に立てる彼等が利子の說明に關しても意見の扞格あるは理の當然なり。吾人は次に聊か彼等の利子に關する論爭を略述すべし。

一

Böhm-Bawerk の見解に從へば、一般に現在の財は同一の種類數量の將來の財よりも價値多き

ものにして此命題こそは利子學說の心髓を成すものなり。而して主觀的評價の結果が客觀的交換價値を決定するものなるが故に、現在財は概して同種同量の將來財よりも高き交換價値及價格を有するものなり。而して此現象は數個の原因を有するものなり。其第一は現在及將來に於ける慾望及準備の相違に存するものなり。第二は將來の慾望及其を滿足すべき財を低く見積ることなり。最後の理由は、現在財は技術上の理由によりて慾望滿足の爲に一層優れたるものにして、從つて將來財よりも高き限界效用を有すと云ふことなり。

斯る命題が利子問題の心髓たる所以を明かならしめんが爲に最も單純なる場合を撰ばんに、其は貸附の場合なり。貸附は現在財を將來財と眞實に交換する場合に外ならず。貸主Aが借主Bに現在財の或高—例へば現在の幾磅—を與へる。Bは其財を好むがまゝに處置すべき完全且自由なる所有を得。之と同樣にBは又Aをして全く同一の併し將來の財の或高—例へば翌年の幾磅—の完全且自由なる所有を得せしむ。而して現在及將來の財の市價を決定する所の主觀的評價の結果は概して現在財に有利なり。從つて借主は現在受くる貨幣を彼が將來與ふる所のより大なる金額の貨幣によりて購うことゝなるべし。斯くして彼は打步(agio)或は割增(premium)を拂はざるべからず。此打步は即利子なり。依て利子とは現在財及將來財の間に於ける價値の相違より最も直接に生ずるものなり。

實に利子は經濟的產物にあらずして時に歸因する打步なり。將來用ふる財と比較して現在用ふる財には割增があるなり。即或貨物によりて現在受く可き service と其れと全く同じき貨物によりて將來受く可き service とを比較するな